

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01206

研究課題名（和文）「日本人の教会」をこえて：カトリック教会のフィリピン人など外国籍信徒に着目して

研究課題名（英文）Toward a multicultural community: A study of non-Japanese nationals in the Roman Catholic Church in Japan

研究代表者

寺田 勇文（Terada, Takefumi）

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：20150550

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本のローマ・カトリック教会（信者数44万人）では、近年フィリピン人、ブラジル人、ベトナム人など外国籍信者のミサ出席者が増えている。さいたま教区など日本人より外国籍信者が多い教区もある。ブラジル人、ベトナム人はそれぞれポルトガル語、ベトナム語のミサに出席する者が多いが、フィリピン人は各地の教会の日本語ミサに出席するケースが増えている。本研究では、こうしたカトリック教会の最近の状況に着目し、日本人中心の教会から、外国籍信者を迎え入れて多国籍、多文化の教会への転換が始まっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人口減少、各種の労働人口不足などにより、現在の日本では外国人の労働力への大きな期待が生まれているが、外国人技能実習制度に見られるように、外国人との共生の実現には様々な課題がある。本研究が対象とするカトリック教会の場合、日本人信者と外国籍信者の間では礼拝のスタイル、文化、価値観の相違は見られるが、両者は共通の信仰、宗教的世界観を保持しており、日本における外国人との共生を考える上で一つのモデルを提供する可能性がある。

研究成果の概要（英文）：In Japan's Roman Catholic Church (440,000 adherents), the number of Filipinos, Brazilians, Vietnamese, and other foreign nationals attending Mass has been increasing in recent years. Some dioceses, such as the Diocese of Saitama, have more foreign nationals than Japanese. Many Brazilians and Vietnamese attend Mass in Portuguese and Vietnamese, respectively, while Filipinos are increasingly attending Japanese-language Masses at churches all over Japan. This study focuses on the recent situation of the Catholic churches and reveals that they are beginning to shift from a Japanese-centered church to a multinational church with the foreign nationals.

研究分野：文化人類学、宗教人類学、フィリピン研究、キリスト教研究

キーワード：キリスト教 移住者 カトリック教会 外国籍信者 フィリピン人 ベトナム人 宗教

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本のカトリック教会が明治期以来の「日本人を中心とした教会」から、「多数の外国籍信者を迎え入れた日本にある教会」へと方向転換を余儀なくされている現状を、いくつかの地域の教会等の実情を調査し、問題点を検討することにあつた。

日本のカトリック教会は日本人信者の減少により、近い将来これまでと同様の教会運営が困難になる可能性が高い。信者の高齢化が著しく、信者数の拡大も難しい。カトリック中央協議会は、日本人を中心とした全国の信者数を 43 万 3813 人 (2017 年末当時) と発表しているが、高齢であること、近くに教会がないことなどにより、定期的にミサに出席する信者は全体の 20% 程度と推定される。地方都市や農漁村部では、日曜のミサ出席者が数人以下という教会も存在する。司祭数も減少し、地方の教会では 1 人の司祭が複数の教会を担当するのが一般的である。

一方、在留外国人のなかでもフィリピン人とブラジル人は、カトリック信者の比率が高い。フィリピンでは国民の 80% 近くがカトリック信者、ブラジルでは近年カトリックの比率は低下しているが、それでも 70% を維持している。在留フィリピン人は 26 万 553 人 (法務省統計、2017 年末当時) で、少なく見積もっても 21 万人以上がカトリック信者である。同様に在留ブラジル人 19 万 1362 人うち、カトリック信者は 13 万人以上となる。過去数年間に急増したベトナム人 26 万 2405 人の場合、国民のカトリック比率 (7%) から考えると、少なくとも 1 万 8000 人以上と推定される。

これらの外国籍信者のすべてが教会と関係を持つとは限らないが、少なくとも数万人が定期的にミサに出席していると考えられる。上のような外国籍信者のうち数万人が、さらに欧米、インド人、アフリカ出身の信者などを加えれば、地域により異なるが、ミサ出席者の多数が外国籍信者と推計される。

こうした状況のなかで、「日本人の教会」という従来のあり方をこえて、今後の多国籍、多文化の教会と教会活動の可能性を検討することを課題としてとりあげた。そのために外国籍信者の多い教会、教区の実情を参与観察等により調査し、問題点を把握することを試みた。

2. 研究の目的

研究の目的は、日本のカトリック教会が外国籍信者をどのように受け入れて、「日本人を中心とした教会」というあり方をこえて、今後の多国籍、多文化の教会と教会活動の可能性を検討することにあつた。

そのための事例研究は、主としてカトリック仙台教区、新潟教区のいくつかの教会で行う計画であった。そのうち仙台教区の A 教会は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の被災地となった地域にある。A 教会は東日本大震災前には、日本人信者が 110 人ほどの教会で、外国籍信者は時折数名がミサに出席する程度だった。しかし、震災後にフィリピン人の母親と国際結婚の子どもたちが徐々にミサに出席するようになり、教会員は 190 人近くに増えた。新潟教区の B 教会は 1980 年代末以後、多数のフィリピン人女性が結婚のために移住してきた山形県庄内地方に位置し、2010 年 10 月に設立され、成人の教会員のほぼ全員がフィリピン人 (フィリピン出身者) という教会である。なお、当初の計画ではもう一つ、仙台教区の福島県にある C 教会も事例研究の対象とする予定であった。C 教会は原発事故以後、住民の移動、転出が続いている福島県下で、フィリピン人、フィリピン出身者が多く集まる教会である。しかし、2020 年 2 月以後の新型コロナウイルス感染症により、カトリック教会のミサ、その他の集まりは中止となったため、参

与観察、インタビュー等が不可能となった。A教会、B教会については2011年以後、何度も訪問する機会があったが、C教会は調査開始時点では数回訪問したことがある程度であったため、コロナ禍ではいかなるアプローチも難しいと考え、事例研究の対象から外した。

カトリック教会は世界各地で多数の民族言語グループを信者としているが、ローマでも多民族社会のアメリカ合衆国、その他の多くの国々でも、ミサは原則として言語別に行われており、1つの教会においてミサを含めて多文化的な教会運営が行われることはまれである。しかし、日本の教会では、外国籍信者のグループ毎にそれぞれの言語でミサを行うことは難しい。東京、横浜、京都、大阪などの大都市にある教会では、英語、ポルトガル語、タガログ語、ベトナム語などでミサを行っているが、そうした外国語のミサを司式することができる司祭は少数である。そうした現実的な制約もあり、大都市以外の多くの教区、教会では、外国籍信者は地域の教会の日本語のミサに出席し始めている。

本研究では、具体的には、多文化的教会への移行、転換の過程で、信者組織、教会運営方法、献金・教会維持費の徴収方法などの見直しなど、組織、財政上の問題、ミサにおける聖書朗読、祈り、聖歌、説教における複数言語併用など典礼に関わる問題、文化的、歴史的、民族的背景により異なる信心業の理解、異なる聖人崇敬と教会暦上の祝日の取り込みなどの課題が実際にどのように取り組まれていくかを明らかにしようとした。事例研究を通じて、個別の教会の事例を列挙するだけでなく、複数の事例を通して、今後の日本のカトリック教会の多文化化、あるいは外国籍信者との共生のための問題点、解決策の一端を提出することが目的であった。

3. 研究の方法

研究方法は、カトリック仙台教区、新潟教区の複数の教会を事例研究の対象として、教会行事等への参与観察と関係者のインタビュー等を行うことが中心であった。

しかし、2020年2月以後、新型コロナ・ウイルス感染症が拡大したため、2020年2月以後、カトリック教会のミサ、その他の集まりは原則として中止された。さらに、調査のための国内での移動は可能ではあったものの、東京など感染者が急速に拡大していた地域から、感染者が少ない東北地方を訪問することは困難となった。ベトナム人信者の状況については、主として、さいたま教区の教会を中心に参与観察を行う予定だったが、ベトナム語のミサも中止となり、関係者との面会も困難となった。当初から事例研究の対象としていたA教会、B教会の関係者には2022年後半までは直接面会することはできなかったが、電子メール、メッセージ等を通じて近況その他の情報を共有することが可能だった。

コロナ禍のなか、2020年4月以後、当初の研究計画、とくに訪問先の教会等における参与観察、関係者のインタビューなどの方法を再考し、当面の間、各教区の教区報、各教会の教会報、関係団体の会報、インターネット上のホームページ、SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)などを通じて、データを収集することに努めた。その際に利用した主な文献、資料、インターネット上の資料は、「カトリック仙台教区報」「カトリック仙台教区東日本大震災復興・支援活動ニュースレター(仙台教区サポートセンター)」「*Sendai Diocese Support Center for Foreigners Newsletter*」「カトリック新庄教会報」「カトリック東京教区ニュース」「CTICカトリック東京国際センター通信(カトリック東京教区ニュースに掲載)」などである。

東京教区のフィリピン人信者のグループは、新型コロナ・ウイルス感染症によりミサ等が中止になったため、インターネット上でZoomにより、ロザリオの祈りなどを行うという新しい形式の集まりを組織した。インターネット上でのロザリオの祈りは2020年夏に開始され、現在までほぼ毎晩、100人近くのメンバーが集まって継続されている。インターネットを利用した祈り、

ミーティング等は、規模や頻度は異なるが他のいくつかの教区でも行われており、こうした外国籍信者が実践している活動も研究の対象とした。

2022 年後半以後は、新型コロナ・ウイルスの感染が一段落したため、仙台教区などの教会を訪問することが可能になった。教会では、十分な感染症対策を施した上でミサなどが再開されたが、出席者はマスクを着用し、座席の間隔を十分にとり、聖歌を歌うことはせず、ミサ終了後は茶話会なども行わずに帰宅するということがしばらく続いた。

一方、新型コロナ・感染症が一段落した 2023 年夏以後は、マニラ首都圏においてフィリピン・カトリック司教協議会、日本に修道者を派遣している女子修道会等で関係者に面会、文献資料の収集を行った。

4．研究成果

本研究の成果は現在まだ集約中であるが、主な成果としては次の点があげられる。

- (1) 文献等を利用して、2011 年 11 月にカトリック仙台教区が設置した「カトリック仙台教区滞日外国人支援センター」の活動を詳細に調べ、そうした活動の意義を明らかにした。同支援センターはフィリピン人とインドネシア人の 2 人の司祭、日本人スタッフで構成され、2011 年 11 月から 4 年近く、東日本大震災被災地となった岩手県、宮城県、福島県で外国籍信者、とくにフィリピン人、フィリピン出身者を中心に、被災後の生活支援をはじめ、英語、タガログ語、インドネシア語等でのミサを行った。さらに震災により職場を失った外国人を対象に、介護ヘルパー 2 級資格取得のための講座(専門講義、介護施設実習、レポート作成など 6 ヶ月間)を運営し、30 数人が資格を得ている。同センターは以上の活動と同時に、各地域の教会や司祭と共に、日本人と外国籍信者が同じ教会に所属し、共同体を築くことができるように活動した。同センターは仙台教区が設置したが、センターの専従スタッフとなった 2 人の司祭は大阪教会管区から仙台教区に派遣されており、センターの活動資金なども大阪教会管区、カリタス・ジャパン、その他日本全国のカトリック教会による支援にもとづいている。カトリック仙台教区外国人支援センターについては、東南アジア学会研究大会(2021 年 12 月)、フィリピン研究全国フォーラム(2023 年 9 月)で報告した。
- (2) コロナ禍で東京教区のフィリピン人グループが 2020 年夏から、インターネット上で毎夜ロザリオの祈りの会を開始しており、100 人近くが出席している。東京教区以外に国内の他の教区や海外からも出席者がみられる。インターネットによるミサの配信は東京教区をはじめ行われていた。新型コロナ・ウイルス感染症の蔓延という新たな事態になかで行われた、外国籍信者による宗教実践については、アテネオ・デ・マニラ大学アジア研究センター主催の国際会議(2022 年 11 月)で報告した。
- (3) 2019 年 11 月のローマ教皇来日時に、「ローマ教皇・東日本大震災被災者との集い」(出席者 300 人)が 11 月 19 日に東京都内で開催された。この集まりには、仙台教区から A 教会の代表、フィリピン人代表の女性をはじめ数十人が出席した。報告者も参加の機会を与えられた。A 教会は東日本大震災後に多くのフィリピン人、フィリピン出身者の信者を受入れ、外国籍信者ととも歩む新しい形の教会運営を始めようとしており、上述の仙台教区滞日外国人支援センターとも密接な関係を築いてきた教会である。
- (4) 2022 年 3 月 19 日には、エドガル・ガクタン神父(淳心会)のカトリック仙台司教叙階式が行われた。コロナ禍のため、感染防止措置がとられた上での司教叙階式だった。

ガクタン神父は 30 数年間、日本で司祭として働き、震災後は A 教会で 3 年数ヶ月、主任司祭を務めた神父である。日本の司教にフィリピン人が任命されたのは初めてであり、これは日本のカトリック教会が外国籍信者ととも教会形成を進めることの意味と重要性を十分に認識していることを表していると考えられる。

- (5) 本研究をまとめるにあたり、上記の(1)～(4)を含め、参与観察、インタビュー、文献調査にもとづいた民族誌的既述を含む単行書を執筆中である。新型コロナ・ウイルス感染症の蔓延により、教会活動が 2 年以上にわたり中断されるなど予期せぬ事態が生じ、実地調査も中断した。しかし、外国籍信者のグループがインターネットなどのメディアを利用して、従来とは異なる宗教実践の形を模索し始めるという新たな展開も見いだされた。本研究が掲げている、日本人の教会を超えて、外国籍信徒をそれまで日本人が中心となって運営されてきた教会に迎え入れ、多文化、多国籍の教会を築いていくのは容易ではないが、そうした試みは教区、教会によってはすでに始められている。そうした現在進行形のありかたを記録にとどめていくことが、今後とも必要とされている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 寺田勇文	4. 巻 64 (1)
2. 論文標題 日本で暮らすフィリピンの人たちの食卓	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本栄養士会雑誌	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺田勇文（編）	4. 巻 26
2. 論文標題 フィリピン出身者を迎え入れて：3/11被災後のカトリック大船渡教会を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 上智大学アジア文化研究所Occasional Papers	6. 最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺田勇文	4. 巻 なし
2. 論文標題 岩手・大船渡 フィリピン人と日本人、入り交じる教会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 カトリック新聞（2019年6月23日）	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 寺田勇文
2. 発表標題 東日本大震災とフィリピン人被災者：カトリック教会による支援活動を中心に
3. 学会等名 第28回フィリピン研究全国フォーラム（宮城学院女子大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 TERADA, Takefumi
2. 発表標題 The Filipino Community and the Roman Catholic Church in Japan: New Developments under Covid-19
3. 学会等名 The 11th ACAS International Conference on Asian Studies (Philippines)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺田勇文
2. 発表標題 東日本大震災と外国人移住者：カトリック仙台教区におけるフィリピン人共同体形成を中心に
3. 学会等名 東南アジア学会第103回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TERADA, Takefumi
2. 発表標題 How have Filipino Catholics changed the Catholic landscape around the world, especially in Japan?
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asian Scholars (online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TERADA, Takefumi
2. 発表標題 A Wartime Filipino Community in Tokyo, 1943-44: The Case of Kojimachi Catholic Church
3. 学会等名 The 18th Annual Conference on Japanese Studies (Davao, Philippines) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 関根淳（執筆）、寺田勇文（監修）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ポプラ社	5. 総ページ数 48
3. 書名 世界のくらし フィリピン	

1. 著者名 信田敏宏 寺田勇文	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 2
3. 書名 東南アジア文化事典（フォークカトリシズム）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------